

概説

維管束植物

植物研究の歴史

島根県の植物については、「出雲国風土記」や江戸時代の「出雲国産物帳・隠岐国産物帳」などの中での記述があるが、学術上での研究は明治時代に始まったといえる。

県下での植物研究のうち、特に植物相や各植物研究に関する概略を記載したい。

明治時代（1868—1912）

例えば、堀正太郎が明治22年（1889）、三宅驥一が明治31年（1898）に隠岐諸島での植物調査を行っており、明治40年（1907）に徳淵永治郎が隠岐諸島の島後、西ノ島、中ノ島の植物を調査し、堀、三宅の調査結果とともに、当時の知々井小学校教員松本常男の標本約130点をもとに「隠岐島植物分布論」（1911）に維管束植物619種を記載している。

さらに明治37年（1904）に島根県女子師範学校教諭として赴任した平田駒太郎が校舎敷地内に植物を植え、さらに、のち久徴園と称される隣接する山林地にも植栽は広がった。この全国的にも特筆される平田植物園とよばれる学校植物園は現在の島根県立出雲高校に引き継がれ、自然科学の普及に貢献している。

大正時代（1912—1926）

大正時代の史料は乏しいが、大正12年（1923）に原貞吉による「鰐淵寺附近の植物目録」の報告がある。

昭和（戦前）（1926—1945）

昭和年代になってからは、桜の研究者として知られている三好学による「天然記念物調査報告 植物の部No.15,17」（1935,1937）では三隅大平桜、松江藩津田の松並木、海潮村のカツラの報告が見られる。昭和10年代からは丸山巖による県内全域における詳細な調査が行われることになる。戦前には丸山巖による「仁多郡植物誌Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」（1929）、林実による「北出雲植物小話」（1936）が確認できる。また昭和10年（1935）には浜田の柿木山国有林で採集会があったこと、昭和10年代初期に発足した能義郡理科教育研究会での第1回研究会では清水寺において雪吹敏光講師指導で採集会を行ったことなどを史料から知ることが出来る。これは各地で作られた理科教育普及のための研究会や全国的な植物観察会の興隆の流れが島根もあったことが分かるものである。

昭和（戦後）（1945—1980）

戦後には本格的な植物研究が行われることとなる。特筆すべきところでは、やはり丸山巖によるもので、「山陰植物管見Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」（1963,1967,1969）によって県下における貴重な植物の研究の詳細が記載されている。また「島根県大百科事典上下」（1982）では丸山の記載によってこの時期に知られていた県下の貴重な植物すべての状況を知ることができる。これによれば今でも貴重とされる植物分布のほとんどが解明されていたことが分かる。また丸山は、地元の特異な植物を中央の研究者と共同で研究を進め、イズモコバイモ、オウチカンギク、インヨウチク、トゲナシアザミ、サンインギクなどの原記載などに大きく貢献している。

また、宮本巖も県下の植物群落を植物社会学的に研究する傍ら、「西部石見の高等植物目録」（1963）、「島根半島植物誌」（1973）をはじめとする各地の植物相の調査他、地方史への動植物の記述、地倉沼の遷移などの研究を行っている。

また、隠岐においては、機関紙「隠岐の文化財」に見られる昭和25年（1950）に記述された岡部武夫による植物の分布状況の紹介（1997,1998）の他、1940年代から1990年代に至る木村康信の各報告が特筆され、後の報告にはなるが、集大成として報告された「島前の植物目録（Ⅰ）～（Ⅳ）」（1982—1988）などが注目される。

また、この時期に「国立公園候補地基本調査 隠岐島・島根半島・三瓶山」（1960島根県）も報告されている。

その他特筆すべきものとして「立久恵峡の植物と植物目録」森山美具・青木充之（1978）、「島根産スゲ属植物」岡本香（1971）、「隠岐の植物（一）（二）」岡国夫（1968,1969）、「隠岐島・島根県東部のシダ植物の分布について」山本 廣（1980）などが見られる。

昭和50年代末期から前回のRDB改訂まで（1980—2013）

1970年代からは、枚村喜則による調査が行われるようになった。枚村も植物社会学的手法で県内の植生を調査する中で植物相の解明にも取り組んだ。その中で「島根半島の植生と植物相Ⅰ—Ⅴ」（1987—1991）、「隠岐諸島の植生と植物相 森林植生、海岸植生、シダ植物」（1994,1995,1997）は特に研究対象とする地域の詳細な植生と植物相を解明した。また、「島根県のシダ植物相」（1997）、「島根県の種子植物相」（2005）、「島根県の種子植物相（補遺）」（2006）によって普通種を含めた島根県の全植物相のリストが発表されることとなった。また、これの根拠となる標本も三瓶自然館に収蔵され、そのリストも「枚村喜則氏収集植物標本目録Ⅰ—Ⅲ」（2009,2014,2020）として発表されている。

また、枚村は植物観察の普及にも熱心で、各種観察会ではユニークな人柄と出雲弁での解説が人気をかくし、島根大学白濁サロン主催の観察会で「神社の森を歩く」「緑の野山を歩く」は2004年から2013年まで月1回開催され、93回を数えるが、多くの参加者が植物の面白さを体験した。さらに植物を詳しく知りたいと考え、同氏を慕う社会人を中心とした「シロダモ会」が結成され、これは現在も活動が続けられている。また、研究室においても植物に興味のある学生が学部を越えて集まり、島根県の植物の解明に貢献することとなった。

さらに枚村の発案により島根県でも植物を研究する集まりを作ろうとなり、2003年に「島根植物研究会」が発足した。これは植物観察会とともに地元の植物の状況を発表する場を作りたいとして会報を発行することとなった。この会報を通じて、地元での植物研究がさらに活発になった。

特記する事柄として、枚村による県下の貴重な植物の発見の経緯や分布状況などの報告があり、植物研究上貴重な史料となっている。さらに、研究会発足以前の2000年から益田市を中心にシダ植物を観察していた篠原良夫と澤江 宏の報告も特筆される。二人は益田市のシダ植物調査を1週間に1回行うことを決め、調査している（2009年の17回目の報告に通算396回との記述がある）。これによって「益田市に自生するシダ植物調査の中間報告(1)―(21)」（2003—2012）を報告している。この調査の中でホウライヒメワラビ、テツホシダの新産地、フクロシダ等貴重な植物を多数発見している。さらに柴田一樹によるクロイチゴやメヤブソテツ等の発見をはじめとする県内の各植物の報告、廣江伸作による安来市を中心とした植物相調査でのヒメシロアサザ、ミ

ズネコノオ等の発見、津島辰雄によるイヌドウナ、ツルツゲ、ゲンカイツツジ等の発見、山田 明のホザキノヤドリギの発見、柳浦正夫による各地のシダ植物や県下での水草の状況などの報告がある。

この島根植物研究会の会報によって県下の植物研究は大幅に進展したと言えるのではないかとと思われる。近年発表者が少なくなっているが、現在県下の植物を精力的に調査している澤田達也の入会によって息を吹き返している。地元の身近な植物の状況などを発表する手段として絶対に途切れさせてはいけないという意識をもって続けているところである。

さらにこの時期では、國井秀伸による県東部のため池や宍道湖などの湖沼の水草の調査などが特記される。

前回のRDB改訂後（2013より）

平成26年（2014）10月21日に植物研究や植物観察を指導されてきた枚村喜則氏が逝去された。これにより植物研究の精神的支柱を無くしてしまったが、県下植物の詳細な記録も失われてしまったということにもなった。

しかし、引き続き植物研究は継続されている。例えば、「三瓶自然館研究報告」に関わる井上雅仁は草地・湿地研究の他、三瓶自然館の標本管理や研究助成で県下の植物研究に多大な貢献をしている。また「ホシザキグリーン財団研究報告」に関わる三浦憲人は染色体研究の他、辻井要介とともにオニバス、佐藤仁志とともにイズモコバイモ研究・保護に尽力している。さらに野津貴章は「松江の花図鑑」というHPを立ち上げ、植物の各形態をアップで掲載し、詳細な解説を加えており、全国的に非常に評価の高い植物紹介コンテンツとなっている。「松江市史史料編1 自然環境」（2019）でもシダ類以外のすべての植物写真や松江市植物目録（シダ植物を除く維管束植物）の市内の各町での文献以外の情報はほとんど野津によるものである。

これも以前から隠岐植物の調査を継続しているが、丹後亜興はHPを利用して、隠岐の植物を紹介し、「隠岐の文化財」という郷土刊行誌にハマボウやヒモカズラなど、発見した貴重な植物を紹介している。

改訂RDBにあたって

今回のRDBの掲載種の選定ではこれまでの文献を通して減少していると考えられるものや、現状では確認できないが以前は生育したのではないかと考えられるもの等ははっきり判断できないものもすべて俎上に載せて今後の検討に資するようにした。そのため前回に比べて大幅な増加となったが、これで憂慮すべき種のすべてが掲載できたと考えているわけではない。ただ、これにより減少している種がとて多いことを認識してもらい、さらに各種の保存を具体的に考えてもらうきっかけになるのではないかと考えている。

今、自然保護の意識は高まっているが、急速に自然環境が変化し、以前は普通に見られた動植物が見られなくなっている状況に、はじめは全くかかっていない。特にため池の植物などは顕著であるし、遷移による林床植物の絶滅、生育が拡大しているシカによる植生の破壊など憂慮すべき事象ばかりである。

植物であればきれいな花の咲く種だけではなく、目立たない、また人知れず絶滅に向かっている種に対しても積極的に、環境を含めての保全を進めていけるようになっていきたい。そのための現状の調査にとどまらず、積極的な保全にも貢献できればと考えている。

以下に長年島根県の植物を見つけてきた枚村喜則による前回RDBでの「植物相の概要」における思いも取上げておきたい。

「植物相の概要」で記載されている種類の多くは改訂版種選定カテゴリーの定義に従い、絶滅が心配される種として選定されているが、これらの植物種はもともと、生育する場所が限られていて、生育地の範囲、面積が小さい場合のものである。しかし、ここに取り上げられた植物の中には、過去においては生育地が広い範囲にあって、当時では絶滅が心配される状態でもなかったものが、何らかの原因によって現在では存続が危惧される状態となったと考えられる種もある。本文解説中の選定理由に多くが「……生育地が限られ……」と記述されていて、現在に至る状況は記述されていないが、その植物の分布上でもともと限られている場合と何らかの原因により生育地が限られてきた場合もある。

昭和30年代において植物に対しての直接あるいは間接的な干渉の結果として、植物の種類によっては生育地や個体群の激減、消滅が気付かれるようになった。化石燃料が有効に利用されて、薪炭が不用となり林地が放置されることにより、特に林縁草地などの草原状地の植物、オキナグサ、ムラサキセンブリ、ヒゴタイ、マツムシソウ、フクシマシャジン、リンドウ、キキョウ、オミナエシ、センブリなどが激減してきた。また、機械化により、牛馬飼育のための草刈りは不用となり、同様に草原性植物が激減してきた。一方、各種土木工事は機械による効率化から農地での区画整理などにより水田周辺の水湿地の植物がかなり影響を受け、県内ではサンバサワアザミ、イヌセンブリ、トモエソウ、カキランなどの植物が激減し、生育地が消滅した場も多い。水田に関しては除草剤の開発、使用により水田雑草はほとんど絶滅状態である。山間の水田などでは僅かに水田周囲の水湿地に残されていたスブタ類、ホシクサ類など、減反政策により一時的に息を吹き返したようにも思われたが、水田周囲が樹林化することにより、絶滅寸前であり、県内全域での現状がつかみにくい。また、溜池や用水路においても同様にこの時期に多くの水生植物が激減、消滅した生育地が多い。特に里山の溜池では、除草剤や生活廃水の流入も考えられない池においても水生植物が全滅してしまった池が多く存在している。

植物分布の概要

島根県は本州の西端域に位置し、東西200kmにおよぶ海岸線、本土から40km北方に位置する隠岐諸島、汽水湖である宍道湖・中海、海拔1,000～1,300m程の中国山地脊梁部と多様な環境をもっている。年平均気温は海岸域で14～15℃、中国山地域で10～11℃前後で、冬山地には根雪も見られる。

特徴ある植物を各項目にわけて記述する。

南方から続く種

海岸部に生育する種は海岸線で北上して生育している場合もあるが、内陸部で特に谷部に生育する種は瀬戸内海から中国山地の谷部などの低地を越えて分布しているのではと考えられる種もある。これには分けにくい南方系の種と分布の中心が太平洋側である種が考えられる。

ここにあげられる種は、従来、太平洋岸での分布のみが図鑑等に記述されていたが、日本海側での分布についても重要である。特に長い海岸線を持ち、さらに本土から離れ、石川県と同緯度の隠岐をもつ島根県での分布状況は非常に重要であると考えられる。

(1) 西部までの分布

ホウライヒメワラビ、オニマメツタ、シマサルナシ、イガクサ、オオカグマ、トキワスキ、タイミンタチバナ、コバンモチ、ク

スドイゲ、カンコノキ、ハウロクイチゴ、シイモチ、ジュズネノキ、ボタンボウフウ、ミゾシダモドキ、ツルホラゴケ、ヌカイトチシダモドキ、クルマシダ、イワタバコ、ツクシイワヘゴ、ハルトラノオ、ヒナノカンザシ、ナガバノヤノネグサ、オオバナスビトハギ、ツクシクロイヌノヒゲ、ツクシヤブソテツ、ミヤコイヌワラビ、シロモジ、サンヨウアオイ、ヘラノキ、アオカモメヅル等

(2) 中部まで分布

カギカズラ、ウドカズラ、ナナミノキ、フタバアオイ、シモバシラ、ヒメナベワリ、タキキビ等

(3) 東部まで分布

ツクシイヌワラビ、サカキカズラ、オオバヤドリギ、イズセンリョウ、フウトウカズラ、イスノキ、アンペライ、ホソバワダン、キミズ、ミソナオシ、ソナレムグラ、マテバシイ、ノシラン、ミヤマミズ、コケミズ、アオイゴケ、アマクサシダ、イシカグマ、カツモウイノデ、タカサゴキジノオ、ヤマホウズキ、ナガサキシダ、ホウビシダ等

(4) 隠岐まで分布

ハマビワ、ナチシダ、テツホシダ、マシカクイ、バリバリノキ、ヒゲスゲ、ハマナデシコ、シシラン、ナゴラン、マヤラン、テツホシダ、ヒモラン、アオネカズラ、ナンカイイタチシダ、ヌカボシクリハラン、イワタイゲキ、ホウライカズラ、シシキリガヤ、ダンチク、ハマボウ、マメツタラン、ムギラン、オオバヤドリギ、コケミズ等

大陸と関連の深い種。

県内に分布する植物の内、東北地方、北海道などの北方から分布が続く植物や、朝鮮半島から中国大陸から分布が続く植物も知られている。さらに北方から続く種の中には多雪地帯の日本海側に分布の中心のある種もある。それらは残存種として中国山地の脊梁部や湖沼などに生育するものや、山地や丘陵部に北方から連続して生育するもの、また、海岸部に生育するものなど様々である。

(1) 北方・寒地系の植物

ハマハコベ、マルバウマノスズクサ、ハチジョウナ、エゾオオバコ、ハイネズ、ハマベンケイソウ、ハマナス、オオクグ、オオエゾデンダ、マンシュウハシドイ、エゾノヨロイグサ、ニッコウキスゲ、キンコウカ、ホソバノアマナ、ミヤマベニシダ、シノブカグマ、シラネワラビ、ヤマドリゼンマイ、ミツガシワ、サギスゲ、

リュウキンカ、サンカヨウ、ツルネコノメソウ、アイズシモツケ、イヌドウナ、ツルツゲ、オオマルバノホロシ、ハイハマボス等

(2) 朝鮮半島から中国大陸に分布が続く植物

ダルマギク、チョウジガマズミ、ヤナギイボタ、オニヒョウタンボク、タケシマシシウド、モクゲンジ、ホソバママコナ、クルマバアカネ、ヒゴタイ、ミツバイワガサ、ザリコミ、ホクチアザミ、ヨロイグサ、ホザキノヤドリギ、チョウジソウ、スジヌハハリイ、クサタチバナ、ゲンカイツツジ、シロヤマブキ、イワウメヅル、ヒョウタンボク等

(3) 日本海側に特有な分布の植物群

オオバクロモジ、オニシモツケ、クロバナヒキオコシ、サンインヒキオコシ、タニウツギ、カンボク、サンインクワガタ、デウノタツナミソウ、ミヤマキケマン、ナガハシスミレ、トキワイカリソウ、ヒメモチ、カラスシキミ、エゾユズリハ、ハイイヌガヤ、チャボガヤ、ハイイヌツゲ、ボタンネコノメ、ホクリクネコノメ、ツルシキミ、サンインシロカネソウ、ホナガクマヤナギ、アラゲナツハゼ、イワナシ、ハマベノギク、ユキグニミツバツツジ等。

固有種

(1) 中国地方を中心に種分化

ダイセンヒョウタンボク、ダイセンミツバツツジ、ダイセンスゲ、ダイセンオトギリ、アラゲナツハゼ、キシツツジ、ヒメヤマツツジ、トゲナシアザミ (イズモアザミ)、ゲイホクアザミ、ナガトアザミ、サンベサワアザミ、サンインギク (シマカンギク9倍体)、ナツアサドリ、トウテイラン、ヘイケイヌワラビ

(2) 島根県固有種

オキタンポポ、オキノアブラギク、オキシヤクナゲ、オキノアザミ、オオメノマンネグサ、オッタチカンギク、サンイントラノオ、イズモコバイモ、トウテイラン (分布中心)

その他

襲速紀植物とされる種としてギンバイソウ、キレンゲショウマ、オオマルバノテンニンソウ、シロモジなどの生育地も知られている。

また、イワギリソウやオオダイトウヒレンなど点々と隔離分布する種や、オナモミやアサザ、オニバス、オグラノフサモなど全国的に減少が著しい種などもある。これは各種解説に状況を記載している。

(柳浦正夫・枚村喜則)

維管束植物掲載種一覧

計612種

絶滅 (EX)

- | | | |
|--------|---------|----------|
| ↑デンジソウ | ↑クモノスシダ | ○マルバオモダカ |
| ○ヒメユリ | ・ハマビシ | ○ヒロハネム |
| ○ヒメビシ | ○オニビシ | ○イシモチソウ |
| ○サクラソウ | | |

計10種

絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- | | | |
|----------|---------------|------------|
| ・スギラン | ・マンネンスギ | ・ヒモラン |
| ○ヒモカズラ | ↑ミズニラ | ・オオバシナミズニラ |
| ・イヌスギナ | ○ナガボノナツノハナワラビ | ◇ハマハナヤスリ |
| ・マツバラ | ・ツルホラゴケ | ○ヒメコケシノブ |
| ・アカウキクサ | ・タカサゴキジノオ | ・フジシダ |
| ・タキミシダ | ・ハコネシダ | ・アマクサシダ |
| ◇ナカミシシラン | ・イワトラノオ | ・ホソバショリマ |
| ・ヒメハシゴシダ | ・ミゾシダモドキ | ・フクロシダ |

- ヘイケイヌワラビ
- イズヤブソテツ
- ホウライヒメワラビ
- オニマメヅタ
- オオエゾデンダ
- マルバウマノスズクサ
- マイヅルテンナンショウ
- イワショウブ
- ↑トチカガミ
- ヒナノシャクジョウ
- マルバサンキライ
- ホソバナアマナ
- キエビネ
- ユウシュンラン
- タシロラン
- アオフタバラン
- ミズチドリ
- コバノトンボソウ
- カシノキラン
- クモラン
- カキツバタ
- ユウスゲ (キスゲ)
- ツクシクロイヌノヒゲ
- サギスゲ
- イワタケソウ
- ミチノクフクジュソウ
- カザグルマ
- バイカモ
- ↑ヤシャビシャク
- ウドカズラ
- ミソナオシ
- ヒナノカンザシ
- ヨコグラノキ
- シウリザクラ
- サナギイチゴ
- イワウメヅル
- コミヤマスマミレ
- コフウロ
- ↑コガンピ
- ↑オオヤマフスマ
- ハイハマボッサ
- ↑サラサドウダン
- ◇シャクジョウソウ
- ジュズネノキ
- イヌセンブリ
- アオカモメヅル
- マメダオシ
- ハマベンケイソウ
- イワギリソウ
- オオヒナノウスツボ
- コムラサキ
- ◇キセワタ
- ヤマウツボ
- ミヤマウメモドキ
- カツモウイノデ
- ツクシャブソテツ
- ナガサキシダ
- ホテイシダ
- イワオモダカ
- ウスバサイシン
- ヒメザゼンソウ
- アギナシ
- ↑オヒルムシロ
- ホンゴウソウ
- ホソバナコバイモ
- マメヅタラン
- キンセイラン
- マヤラン
- フガクスズムシソウ
- ヤクシマヒメアリドオシラン
- イイヌマムカゴ
- トキシソウ
- マツラン
- カヤラン
- アヤメ
- ゼンテイカ (ニッコウキスゲ)
- スジヌマハリイ
- ↑ネビキグサ (アンペライ)
- エゾキケマン
- ↑ニリンソウ
- ミスミソウ
- ベニバナヤマシャクヤク
- ザリコミ
- ハマナタマメ
- オオバナスビトハギ
- ナツアサドリ
- アイズシモツケ
- ↑シロヤマブキ
- ホウロクイチゴ
- ↑ダイセンキスミレ
- ホソバシロスミレ
- テツカエデ
- キガンピ
- ↑ワチガイソウ
- シマサルナシ
- ↑ベニドウダン
- ウラジロハナヒリノキ
- クチナシ
- チョウジソウ
- フナバラソウ
- ◇アオホオズキ
- イワタバコ
- サンイントラノオ
- カイジンドウ
- フトボナギナタコウジュ
- シロバナヤマジソ
- ↑ノタヌキモ
- シデシャジン
- メヤブソテツ
- タカサゴシダ
- クラガリシダ
- ヌカボシクリハラン
- オニバス
- オオヤマレンゲ
- ハナゼキショウ
- マルミスブタ
- キンコウカ
- バイケイソウ
- イズモコバイモ
- ムギラン
- サルメンエビネ
- クマガイソウ
- ジガバチソウ
- サギソウ
- ヤマサギソウ
- ウチョウラン
- ナゴラン
- ショウキラン
- ヒオウギアヤメ
- オオミクリ
- チャボイ
- ノグサ
- サンカヨウ
- キクザキイチゲ
- ヒメバイカモ
- ツルネコノメソウ
- ↑アオベンケイ
- タヌキマメ
- サイカチ
- ホナガクマヤナギ
- ヒロハノカワラサイコ
- ハマナス
- コジキイチゴ
- サクラスミレ
- ダイセンオトギリ
- ハマボウ
- ハマサジ
- キレンゲショウマ
- マルバノイチャクソウ
- イワナシ
- ヒメヤマツツジ
- ムラサキセンブリ
- クサタチバナ
- タチカモメヅル
- ヤマホロシ
- シシンラン
- ミヤマクワガタ (ダイセンクワガタ)
- ↑オウギカズラ
- シモバシラ
- キュウシュウコゴメグサ
- ナナミノキ
- ↑モリアザミ

- ◇バアソブ
- ・アサザ
- ◇ムラクモアザミ
- ・スイラン
- ◇ミヤコアザミ
- ・オオダイトウヒレン
- ・ハチジョウナ
- コウリンカ
- ・ウラジロウコギ
- ・アマニユウ
- ・ムカゴニンジン
- ・ヤブウツギ

- ・キキョウ
- カワラハハコ
- ・ヒゴタイ
- メタカラコウ
- ヒメヒゴタイ
- ハンゴンソウ
- ・キビシロタンポポ
- ウラギク
- ・エゾノヨロイグサ
- ・タケシマシシウド
- ・ダイセンヒョウタンボク

- ↑ミツガシワ
- ・チョウジギク
- ・ヤナギタンポポ
- イヌドウナ
- ・キクアザミ
- ・オカオグルマ
- トウカイタンポポ
- ケヤマウコギ
- ・ヨロイグサ
- ↑ボタンボウフウ
- マツムシソウ

計220種

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- ・ヒロハハナヤスリ
- ↑ウスヒメワラビ
- ↑ムクゲシケシダ
- ・ツクシイワヘゴ
- アツギノヌカイタチシダマガイ
- ・ナンカイイタチシダ
- ・サジラン
- ハイネズ
- ↑ヒツジグサ
- ・タイリンアオイ
- ヒロハテンナンショウ
- ヒロハトリゲモ (サガミトリゲモ)
- コバノヒルムシロ
- ・イトクズモ (ミカツキイトモ)
- ・カタクリ
- ・ナツエビネ
- ササバギンラン
- ・カキラン
- ・ベニシュスラン
- ムヨウラン
- オオヤマサギソウ
- ・コキンバイザサ
- シロウマアサツキ
- ・オオホシクサ
- ヒメスゲ
- オニナルコスゲ
- イガクサ
- ヒロハノコヌカグサ
- イブキヌカボ
- ・サンヨウブシ
- タカネハンショウヅル
- ◇シマキツネノボタン
- チョウセンヒメツゲ
- ・シラヒゲソウ
- ・オグラノフサモ
- アマヅル
- ・ミヤコミズ
- オニシモツケ
- イワキンバイ
- ハシバミ
- ↑イワタイゲキ

- コケシノブ
- ・テツホシダ
- ↑シノブカグマ
- ・ツクシオオクジャク
- ・ミヤマクマワラビ
- ↑シノブ
- ・ビロウドシダ
- ・イチイ
- ・フタバアオイ
- コブシ
- セトヤナギスブタ
- ↓イバラモ
- ↑イトモ
- ・カワツルモ
- ・ヒナラン
- ・ギンラン
- ・トケンラン
- オニノヤガラ
- ミズトンボ
- ヒメフタバラン
- ・ヤマトキソウ
- ノハナショウブ
- ・ミズアオイ
- ヒロハノオオタマツリスゲ
- ◇アブラシバ
- ・マシカクイ
- コシンジュガヤ
- インヨウチク
- アイアシ
- ・アズマイチゲ
- ↑サンインシロカネソウ
- オトコゼリ
- ヤマシャクヤク
- ヤブサンザシ
- ↑タチモ
- ケンポナシ
- ・ミヤマミズ
- シモツケソウ
- ・キビナワシロイチゴ
- ウメバチソウ
- ・カンコノキ

- ↑オオアカウキクサ
- ・ツクシイヌワラビ
- ミドリカナワラビ
- ・ヌカイタチシダモドキ
- ・イワイタチシダ
- ・ヒメノキシノブ
- ヒノキ
- ↑ジュンサイ
- イズモサイシン
- オモゴウテンナンショウ
- ↑ヤナギスブタ
- ・セキシヨウモ
- ・リュウノヒゲモ
- ・ヒメナベワリ
- ・エビネ
- ・キンラン
- ・セッコク
- クロヤツシロラン
- ホクリクムヨウラン
- ↑ヨウラクラン
- ヒトツボクロ
- ・ヒメシャガ
- ・ヒメミクリ
- サンインヒエスゲ
- ノスゲ
- オオイヌノハナヒゲ
- ヒメコヌカグサ
- ・トウササクサ
- ルイヨウボタン
- ・リュウキンカ
- ・オキナグサ
- ミヤマカラマツ
- コガネネコノメソウ
- ・タコノアシ
- ↑フサモ
- ケケンポナシ
- クロイチゴ
- ミツモトソウ
- ユキヤナギ
- クロツル
- ↑バッコヤナギ (ヤマネコヤナギ)

- ツルタチツボスミレ
- ・トモエソウ
- ・カジカエデ
- ヒナウチワカエデ
- シコクハタザオ
- ・ホザキノヤドリギ
- ・ナガバノヤノネグサ
- オオネバリタデ
- ・ハマナデシコ
- オキシャクナゲ
- ミヤマムグラ
- ・カギカズラ
- アイナエ
- サイゴクイボタ
- ナンゴククガイソウ
- ジャコウソウ
- ・コナミキ
- ・ホソバママコナ
- ヒキヨモギ
- ヒメタヌキモ
- ・カリガネソウ
- タマミズキ
- ・ヒツクアザミ
- ・カシワバハグマ
- ヌマダイコン
- ・テリハアザミ (タイシャクアザミ)
- ↑ナガバノコウヤボウキ
- ハナビゼリ
- セリモドキ
- ・ヤマヒョウタンボク
- ・カンボク

- アカネスミレ
- イヨフウロ
- カラコギカエデ
- ・カラスシキミ
- マルバコンロンソウ
- マツグミ
- アオヒメタデ
- ネバリタデ
- オオヤマハコベ
- ・ホンシャクナゲ
- オオハシカグサ
- リンドウ
- ・サカキカズラ
- ・ハシドイ
- ・ゴマノハグサ
- サンインヒキオコシ
- ツクシタツナミソウ
- ハマウツボ
- ・タヌキモ
- ・ムラサキミミカキグサ
- クマツヅラ
- ツルツゲ
- ・サンベサワアザミ
- ・クシバタンポポ
- ホソバナヤマハハコ
- ・オオモミジガサ
- アオヤギバナ
- ・ホタルサイコ
- ・サケバゼリ
- ・ヒョウタンボク

- ヒナスミレ
- ・ビッチュウフウロ
- ・メグスリノキ
- イワハタザオ
- オオユリワサビ
- ・ハルトラノオ
- サクラタデ
- ノダイオウ
- ↑タイミンタチバナ
- ・アラゲナツハゼ
- ヤマトグサ
- ↑ホウライカズラ
- ・サウルリソウ
- ↑イヌノフグリ
- ・サンインクワガタ
- オカタツナミソウ
- シソバタツナミ
- シオガマギク
- ・ミミカキグサ
- スズムシバナ
- ・シイモチ
- ・フクシマシャジン
- ・サワギキョウ
- ↓ヒメシロアサザ
- ミヤマヤブタバコ
- ウスゲタマブキ
- オナモミ
- ドクゼリ
- カワラボウフウ
- ↑オニヒョウタンボク

計214種

準絶滅危惧 (NT)

- ・ミズズギ
- ↓ヤシャゼンマイ
- ・オオフジシダ
- ・コバノヒノキシダ
- ・ミヤコイヌワラビ
- ・ハチジョウベニシダ
- タニヘゴ
- ・アオネカズラ
- ・カヤ
- ・サンヨウアオイ
- ウラシマソウ
- ◇トリゲモ
- ジンバイソウ
- ノカンゾウ
- ・ミクリ
- ・サツマスゲ
- ・ヒトモトススキ (シシキリガヤ)
- ジロボウエンゴサク
- ・イスノキ
- ・オオメノマンネングサ
- ツルマオ
- ◇コゴメウツギ

- ・ナツノハナワラビ
- ↓ウチワゴケ
- ・シシラン
- ・クルマシダ
- ・ハコネシケチシダ
- ギフベニシダ
- ・ヒメサジラン
- ヒメコマツ
- ・コウホネ
- ・シロモジ
- ・スブタ
- ・オオトリゲモ
- ・フウラン
- オオキツネノカミソリ
- ・ヤマトミクリ
- ・キノクニスゲ
- ・タキキビ
- ・ユキワリイチゲ
- ・ミツバベンケイソウ
- コバノチョウセンエノキ
- ・キミズ
- ヒメヘビイチゴ

- ◇コヒロハハナヤスリ
- ・イシカグマ
- ・ホウビシダ
- ・オオカグマ
- シラネワラビ
- ミヤマベニシダ
- ・カラクサシダ
- クロベ
- ・ハンゲショウ
- ・バリバリノキ
- ↓イトトリゲモ
- ササバモ
- ヒオウギ
- マイヅルソウ
- ・ナガエミクリ
- ・オオクグ
- ・ウキシバ
- ・コウヤミズキ
- ・ツメレンゲ
- オヒョウ
- ・コケミズ
- ・オオヤマザクラ (エゾヤマザクラ)

- | | | |
|--------------|-------------------|-----------------|
| ○エドヒガン | ○カジイチゴ | ・ナンキンナナカマド |
| ・シモツケ | ・サクラバハノキ | ○サワシバ |
| ・コバンモチ | ○ヒゴスミレ | ○エイザンスミレ |
| ○ニオイタチツボスミレ | ○シコクスミレ | ○アサノハカエデ |
| ・モクゲンジ | ○フユザンショウ | ・ヘラノキ |
| ○コショウノキ | ○ミズタガラシ | ○オオバヤドリギ |
| ・マダイオウ | ○モウセンゴケ | ○ナンバンハコベ |
| ○ヒメウツギ | ○リュウキュウマメガキ | ・クロバイ |
| ○サワフタギ | ○ウメガサソウ | ・レンゲツツジ |
| ・ゲンカイツツジ | ○クルマバソウ | ○ソナレムグラ |
| ・イナモリソウ | ○クルマバアカネ | ○オオカモメツル |
| ○ツルガシワ | ・スズサイコ | ・アオイゴケ |
| ○ヤマホオズキ | ○イガホオズキ | ○ハシリドコロ |
| ○ハダカホオズキ | ・ホタルカズラ | ○オニルリソウ |
| ○シオジ | ・ヤナギイボタ | ○ヒイラギ |
| ○マルバノサウトウガラシ | ○スズメハコベ (スズメノハコベ) | ・カワヂシャ |
| ・トウテイラン | ○ムシクサ | ○ヒキオコシ |
| ・イヌタヌキモ | ○ハグロソウ | ↓ヤマザトタンポポ |
| ・ガガブタ | ・ヒロハヤマヨモギ | ○イナカギク (ヤマシロギク) |
| ・ダルマガク | ○サンインギク | ・オッタチカンギク |
| ・ハマベノギク | ○オタカラコウ | ○ハンカイソウ |
| ○ニシノヤマタイミンガサ | ○ヤマタイミンガサ | ○ホクチアザミ |
| ○オキタンポポ | ○ハマボウフウ | ・チョウジガマズミ |
| ○オオツクバネウツギ | ・ナベナ | ・ハマニンドウ |
| ・カノコソウ | | |

計139種

情報不足 (DD)

- | | | |
|---------|------------|-------------|
| ◆アスヒカズラ | ○ツルデンダ | ○ヒルムシロ |
| ○センニンモ | ○ヒロハノエビモ | ○ツリシュスラン |
| ○ギボウシラン | ○スズムシソウ | ○ニラバラ |
| ○トンボソウ | ○ヒメニラ | ○ヒメイズイ |
| ○ホシクサ | ○コウボウ | ○クサボタン |
| ○イワボタン | ・オオバクサフジ | ○クスドイゲ |
| ○マルバスマレ | ○ミヤマツチトリモチ | ○ヤナギイノコツチ |
| ○シラタマノキ | ○コバノカモメツル | ・オオマルバノホロシ |
| ○ヒヨクソウ | ○ハマクサギ | ○ホザキノミミカキグサ |
| ・イトタヌキモ | ○ハバヤマボクチ | |

計29種

【記号説明】

- ・：カテゴリー区分変更なしの種 (301種)
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種 (41種)
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種 (6種)
- ：新規掲載種 (250種)
- ◇：情報不足からの変更種 (13種)
- ◆：情報不足への変更種 (1種)

【掲載順の準拠文献等】

- 海老原淳 (2016) 日本産シダ植物標準図鑑Ⅰ. 学研プラス
- 海老原淳 (2017) 日本産シダ植物標準図鑑Ⅱ. 学研プラス
- 大橋広好ほか編 (2016) 日本の野生植物1. 平凡社
- 大橋広好ほか編 (2016) 日本の野生植物2. 平凡社
- 大橋広好ほか編 (2017) 日本の野生植物3. 平凡社
- 大橋広好ほか編 (2015) 日本の野生植物4. 平凡社
- 大橋広好ほか編 (2017) 日本の野生植物5. 平凡社

絶滅 (EX)

デンジソウ科

デンジソウ

Marsilea quadrifolia L.

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
野生絶滅 (EW)	野生絶滅 (EW)	絶滅 (EX)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 國井秀伸



選定理由

全国的に希少であり、県内では以前は生息していたが、現在確認できない状況となっている。

概要

夏緑性で根茎は細く伸び、葉柄は10-15cmで四葉のクローバーのような小葉をもつ。北海道・本州・四国・九州と奄美大島の低地の水田や池沼などに群生する。国外ではヨーロッパ・インド北部から東アジアに分布する。

参考文献

海老原 淳 (2016) 「日本産シダ植物標準図鑑Ⅰ」.475pp. 株式会社学研プラス,東京
 岩槻邦男 (1992) 「日本の野生植物シダ」.311pp.平凡社,東京
 松江市立第四中学校理科クラブ (1965) 松江市周辺の植物研究Ⅰ 水生植物の調査と観察、クラブの記録: 第1集37-44 松江市立第四中学校
 宮本 巖 (1963) 西部石見の高等植物目録、島根県立益田高等学校高津川総合学術調査研究報告: 29-49
 秋村喜則 (1997) 島根のシダ植物相、ホシザキグリーン財団研究報告1: 221-232

県内での生育地域・生育環境

東部や西部での生育が報告されているが、いずれも絶滅している。隠岐(島後)でも1980年代までは見られたようだが、近年確認できていない。

存続を脅かした原因

除草剤散布、遷移。

(執筆: 柳浦 正夫)

絶滅 (EX)

チャセンシダ科

クモノスシダ

Asplenium ruprechtii Kurata

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅 (EX)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 柳浦正夫



選定理由

県下では個体数が少なく、きわめてまれな生育が知られていた。

概要

常緑性の小型のシダで葉身は単葉で全縁、先端が長く伸び、先端近くに芽を出す。北海道から九州まで広く分布し、山地の石灰岩上に生じることが多いが、安山岩などにも生じるといふ。国外では朝鮮半島・中国東北部・ソビエト東部に分布する。

参考文献

海老原 淳 (2016) 「日本産シダ植物標準図鑑Ⅰ」.475pp. 株式会社学研プラス,東京
 岩槻邦男 (1992) 「日本の野生植物シダ」.311pp.平凡社,東京
 中池敏之 (1992) 「新日本植物誌シダ篇」.868pp.至文堂,東京
 秋村喜則 (1997) 島根のシダ植物相、ホシザキグリーン財団研究報告1: 221-232

県内での生育地域・生育環境

東部の谷間の岩に少数が生育していた。岩質は石灰岩以外のものである。現在は樹木により被陰され、確認できなかった。

存続を脅かした原因

遷移による被陰。

(執筆: 柳浦 正夫)

絶滅 (EX)

オモダカ科

マルバオモダカ

Caldesia parnassiifolia (Bassi, ex L.) Parl.

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅 (EX)

撮影者(提供者):柳浦正夫

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



選定理由

県下では1カ所生育が確認されていたが、環境が変わり見られなくなった。

概要

湖沼やため池、水田などに生育する浮葉から抽水性の1年草。葉柄は長く、葉身は円心形～卵心形で長さ5-15cm、幅5-10cmとなる。花茎を水上に出し、花は紫色で、各節から2-3個の花序をつける。北海道から九州まで分布し、国外ではユーラシア・アフリカ・オーストラリアなどの温帯～熱帯にかけて広く分布する。

参考文献

大橋広好他(2015)「改訂新版 日本の野生植物1」.391pp. 株式会社平凡社,東京
 松村喜則(2005) 島根県の種子植物相、島根県立三瓶自然館研究報告(3): 1-49 島根県立三瓶自然館
 松村喜則(2006) 島根県の種子植物相(補遺)、島根県立三瓶自然館研究報告(4): 41-43 島根県立三瓶自然館
 柳浦(2003) マルバオモダカを島根県で発見、島根植物研究会会報(3): 5 島根植物研究会

県内での生育地域・生育環境

西部のため池で2000年代まで生育していたが、ため池が使われなくなって遷移が進み、少なくとも2010年代に入ってから生育が確認できない状況になっている。

存続を脅かした原因

遷移。

(執筆者:柳浦 正夫)

絶滅 (EX)

ユリ科

ヒメユリ

Lilium concolor Salisb.

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅 (EX)

撮影者(提供者):島根県立三瓶自然館

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類 (EN)



選定理由

県西部の山域での生育が確認されていたが、その後県内では生育が確認されていない。

概要

山地に生える多年草で、茎は30-80cmで、葉は線形で多数つき、柄はない。花は初夏、朱赤色で上向きに咲く。国内では本州～九州。朝鮮半島・中国・アムールに分布する。

参考文献

宮本 巖(1978)「摘み草手帳」289pp. 山陰中央新報社、島根
 大橋広好他(2015)「改訂新版 日本の野生植物1」.391pp. 株式会社平凡社,東京

県内での生育地域・生育環境

県西部の山地で生育していたとの報告があるが、少なくとも1970年代にはすでに絶滅していたようである。

存続を脅かした原因

遷移。

(執筆者:柳浦 正夫)

絶滅 (EX)

ハマビシ科

ハマビシ

Tribulus terrestris L.



カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅 (EW)	絶滅 (EW)	絶滅 (EX)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I B類 (EN)

撮影者(提供者):—

選定理由

県内で1カ所確認されていたが、生育が確認できない状態になっているため。

概要

海岸の砂浜に生える一年草または越年草であって、茎は根際から分枝し、さらに分枝して地に這う型の植物。葉は3-5対の小葉をもつ葉と6-7対の小葉をもつ葉の2型があって対生する。花は夏から秋に咲き、葉腋に径2cmばかりの黄色5弁花を着ける。果実は10本の太い刺と多くの刺状の毛がある。

国内では西日本の海岸に分布域があるものの生育地はまれで、暖地では海岸だけでなく、内陸の乾燥地にも生えたとされる。

参考文献

松江第四中学校理科クラブ(1965) 島根半島の海岸植生調査 I 古浦海岸。クラブの記録 第1集:5-12 松江市立第四中学校
大橋広好他(2016)「改訂新版 日本の野生植物II」.381pp. 株式会社平凡社,東京
杵村喜則(2005) 島根県の種子植物相、島根県立三瓶自然館研究報告(3):1-49 島根県立三瓶自然館

県内での生育地域・生育環境

県内では1960年代に出雲部の砂質海岸で生育地が知られていたが、それ以降見られなくなり、絶滅している。今回個人所蔵の標本が三瓶自然館に収蔵された。

存続を脅かした原因

護岸改修。

(執筆者:柳浦 正夫)

絶滅 (EX)

マメ科

ヒロハネム

Albizia julibrissin Durazz. var. *glabrior* (Koidz.) H.Ohashi

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅 (EX)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

No Image

選定理由

県下でまれな種として報告されたが、現地では枯れてしまい生育が確認できない。

概要

高さ10mになる落葉高木で、日当たりの良い荒原や林縁などに生育する。葉は互生し、7-9対の対生する羽片をつける。羽片は楕円形で、羽軸の上に溝があり、溝に沿った軟毛がある。小葉は羽片に15-30対あり、無柄、狭卵状楕円形で鋭頭。花は7-8月に10-20の花が集まって頭状花序となって集まり、それがさらに複円錐花序となって枝頂にできる。花冠は筒状で、雄蕊は中部まで合着し、長さ25mm程度で突出し、赤紫色なのでよく目立つ。花冠は萼の2-2.5倍で、裂片は卵形で長さ12mm、萼裂片は三角形、側生花は無柄、豆果は広線形で、長さ10-15mmとなる。ネムノキと変種関係にあるとされ、ネムノキの小葉が

羽片中部のものが、長さ10-17mm、幅4-6mmに対し、ヒロハネムでは長さ15-20mm、幅5-7mmとやや大きくなるとされる。分布としてはネムノキが国内では本州・四国・九州・南西諸島に見られ、台湾・中国・朝鮮半島・東南アジアと広く分布するのに対し、ヒロハネムは九州(熊本県天草・鍵島権甕島ほか)に分布するとされる。

県内での生育地域・生育環境

杵村喜則が、松江市の楽山公園で付近のネムノキより早く葉を展開する個体が1株あることから、この標本を元京都大学の村田源に送り同定されたもので、標本も三瓶自然館にある。しかし、現在は枯れており、これに該当するものは確認できていない。

存続を脅かした原因

被陰。

(執筆者:柳浦 正夫)

参考文献

大橋広好他(2016)「改訂新版 日本の野生植物II」.381pp. 株式会社平凡社,東京
杵村喜則(2003) 島根植物分布資料(7)ヒロハネム *Albizia julibrissin* Durazz. var. *glabrior* (Koidz.) Ohashi., 島根植物研究会会報3:6 島根植物研究会
杵村喜則(2005) 島根県の種子植物相、島根県立三瓶自然館研究報告(3):1-49 島根県立三瓶自然館

絶滅 (EX)

ミソハギ科
ヒメビシ
Trapa incisa Siebold et Zucc.

カテゴリー区分			島根県固有評価
2004	2013/2014	2026	—
—	—	絶滅 (EX)	環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

No Image

選定理由

以前は県内に生育していたが、今は見られなくなっている。

概要

湖沼、ため池、河川に生育する一年草。浮葉は広卵状菱形で、径1～2cm。葉柄の基部は長楕円状に膨らむ。また葉の上部の縁はあらい鋸歯となる。花期は7～10月で白花ときに紅色を帯びる。堅果は倒三角状で4個のとげがある。ヒシやオニビシに比べ、堅果の上部の幅が2cm程度とはるかに小さいので区別できる。北海道から九州に分布し、国外ではウスリー、中国（東北部）、朝鮮半島に分布する。

●参考文献

大橋広好他（2016）「改訂新版 日本の野生植物Ⅲ」.338pp. 株式会社平凡社
上田常一（1960）松江市堀川の生物（旧稿）、山陰文化研究紀要、（1）：1-25

県内での生育地域・生育環境

1950年代に県東部の堀川に生育していたとの報告があるが、それ以降の生育は不明であり、現在生育が知られているところはない。

存続を脅かした原因

河川改修、農薬散布、ザリガニ等の採餌などによって絶滅したのではないかと考えられる。

（執筆者：柳浦 正夫）

絶滅 (EX)

ミソハギ科
オニビシ
Trapa natans L. var. *quadrispinosa* (Roxb.) Makino

カテゴリー区分			島根県固有評価
2004	2013/2014	2026	—
—	—	絶滅 (EX)	環境省カテゴリー —

撮影者(提供者):柳浦正夫



選定理由

以前は県内に生育していたが、今は見られなくなっている。

概要

湖沼、ため池、河川に生育する一年草。浮葉は三角状菱形で、葉柄の基部は太く膨らむ。また葉の上部の縁はあらい鋸歯となる。花期は7～10月で白花。堅果は倒三角状で4個のとげがあり、果実中央の突起の基部が太い。ヒシに似るが一回り大きく、葉柄や葉の裏面がしばしば赤色をおびる。堅果もヒシに比べ大きく、堅果上部の幅は45～75mmになる。本州から九州に分布し、国外では東アジアに広く分布する。

●参考文献

小早川誠（2009）松江市内にてオニビシの果実を確認、島根植物研究会会報、（16）：14-15
大橋広好他（2016）「改訂新版 日本の野生植物Ⅲ」.338pp. 株式会社平凡社
上田常一（1960）松江市堀川の生物（旧稿）、山陰文化研究紀要1：1-25

県内での生育地域・生育環境

松江市の堀川では1950年代初期には広く生育していたが、1960年代に入って清掃によりほとんど見られなくなったようである。また、松江市西尾町のため池で果実の殻が確認されているので、ここも以前は繁茂していたことが伺える。このように以前は県内に生育していたが、今は見られなくなっている。

存続を脅かした原因

河川や湖沼の改修、汽水化、ザリガニ等の採餌などによって絶滅したのではないかと考えられる。

（執筆者：柳浦 正夫）

絶滅 (EX)

モウセンゴケ科

イシモチソウ

Drosera peltata Thunb. var. *nipponica* (Masam.) Ohwi

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅 (EX)

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):青木充之



選定理由

県西部で生育していたという記録はあるが、現在確認できない。

概要

酸性の湿地に生える多年草。地下に球状の塊茎があり、茎は高さ10-30cmで根生葉は花期にはなくなる。茎葉は互生し葉柄は長く、葉身は三日月形。表面に長い腺毛がある。花は5-6月に2-10花を先端付近につける。花弁は白色広倒卵形で長さ6-8mm。朝咲いて、午後には閉じる。国内では本州から九州、南西諸島に分布し、朝鮮半島・中国・台湾に分布する。

参考文献

大橋広好他(2017)「改訂新版 日本の野生植物Ⅳ」,348pp. 株式会社平凡社,東京
丸山 巖(1982)イシモチソウ, 島根県大百貨事典編集委員会・山陰中央新報社開発局編,島根県大百科事典上巻,山陰中央新報社 83p.
秋村喜則(2005) 島根県の種子植物相、島根県立三瓶自然館研究報告(3): 1-49 島根県立三瓶自然館

県内での生育地域・生育環境

松江市南部の低地のため池に生育していたが、開発により見られなくなっている。

存続を脅かした原因

開発。

(執筆:柳浦 正夫)

絶滅 (EX)

サクラソウ科

サクラソウ

Primula sieboldii E. Morren

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅 (EX)

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):柳浦正夫



選定理由

県内に生育が知られていたが現在は確認できない状況となっている。

概要

湿気が多い草原や林縁などにはえる多年草で、葉に長い柄があり、葉身は長卵形から卵状長楕円形で長さ10cm、幅6cmまでになる。先は鈍く、基部は浅い心形、縁に浅い不ぞろいな2重の鋸歯をつける。花は4-5月に15-40cmの花茎を伸ばし、先端に5-20個の花を散形につける。裂片は披針形で、花冠は径2-3cmで紅紫色になる。国内では北海道(中南部)・本州・九州に分布し、朝鮮半島・中国(東北部)・シベリア東部に見られる。

参考文献

丸山 巖(1982) サクラソウ, 島根県大百貨事典編集委員会・山陰中央新報社開発局編,島根県大百科事典上巻,山陰中央新報社 657p.
大橋広好他(2017)「改訂新版 日本の野生植物Ⅳ」,348pp. 株式会社平凡社,東京
秋村喜則(2005) 島根県の種子植物相、島根県立三瓶自然館研究報告(3): 1-49 島根県立三瓶自然館

県内での生育地域・生育環境

かつて、東部の山地に生息していたようであるが、かなり以前から生育しているとの情報はない。

存続を脅かした原因

遷移、採集。

(執筆:柳浦 正夫)